

戦艦長門

アインロッキー

平成二十五年 度

赤道祭



戦艦長門アンソロジー

平成二十五年度赤道祭

目次

春の雪

墨丸

p.2

此ノ夏ハ長門に泊まらう！

五郎

p.8

軍艦長門見学記

煤渡

p.9

軍艦長門の日常

アモアマヲ

p.19

おかえりなさい。ただいま。

たま

p.24

Leak

麻刈透

p.32

春の雪

墨丸

戦争が終わった。

彼女は艦内を歩く。

皆、米軍に引き渡すための準備で忙しい。

今までに死んでいった仲間の事を思うと気が重くなった。

彼女のほかにも生き残った艦はいる。

みな一様に暗い顔をしていた。

解体か標的艦にでもなるんだろう。

そんな話が皆に広がっている。

「よう」

声をかけられた。

そこには航海科の大尉、佐藤がいた。

「佐藤、いたの？」

「いたのってひでえな。俺はこの艦の乗員だぜ？いて当然だろ」

そう言うのとにやりと笑った

「で、お前さんは何してる」

「部屋の片づけが終わって荷物を纏め終わったから散歩してるの」

「そうか。しっかし、勿体ねえよなあ」

「そうね……」

「ちげーよ。お前さんの髪だ」

「え……？」

「気持ちは分かるが鉄色の綺麗な髪切っちゃまうなんて」

「……」

「お前、これからどうする」

「きつとGHOに呼ばれるわね」

「お前、こと消す気かあいつら」

「アメリカならやりかねないわ」

「なんだよ。他人事みてえに言うな」

「もう、守るものも何もかも無くしたからかしら。あなたはどのような」

「田舎に帰るよ。田舎に帰って畑でもするかな」

「良いわね。帰る場所があるなんて」

「なあ」

「なあに」

「もしお前さんが無事だったら俺の所に来ねえか」

「あなたの家に？」

「ああ。実家は広い。お前さん一人くらい増えても不自由しないしな」

「二親は？」

「二人とも死んだ」

彼の田舎は九州だ。

規模は東京よりも広島、長崎よりも小さいが幾度か空襲があったのを

聞いた。

「空襲で？」

「ああ。あんな田舎空襲したってどうしようもないけどな」

「悪い事聞いちゃったわね」

「俺が憎いのはアメリカだ。きつと一生憎み続けるだろうな。俺が生

き続けていつか両親の敵とってやろうって思ってた。けどな。でもそ

の前に終わっちゃった。全部な」

戦争がむなししい事はあの時からわかっていた。

でも、止めることができなかった。

なぜなら自分は戦う事を課せられたからだ。

何度仲間が死ぬのを見たか。

その度に人に対して不信感が増していった。

人は醜い。

汚い。

そう思い続け今まで来た。

だから長門はあまり人間が好きではなかった。

あの二人を除いては。

信頼していたあの二人はもう鬼籍にはいつている。

一人は米軍の待ち伏せで。

もう一人は玉音放送を聞いた後出撃し行方不明になった。

山本の訃報を知った日、彼女は髪を切った。

毎日宇垣が手入れをしてくれていた鐵色の髪を――。

「悔しいな」

佐藤が呟いた。

「俺たちは何と戦ってたんだろうな」

そう言った彼の目から涙があふれていた。

「ははっ。大の男が情けねえな」

そう言って拭うが涙は後から後からあふれる。

思わず長門は佐藤を抱き締めていた。

「そうね…何と戦っていたのかしら…」

佐藤は声を殺し泣き続けた。

幸運にも誰も廊下を通らなかつた。

どこかの部屋から兵たちの歌う声が聞こえていた。

暫くして照れたように佐藤は「悪いな」と言って消えた。

「人って暖かかったんだ…」

初めて知った人の体温が愛おしく思えた。

それから数日後、長門の本体は米軍に引き渡された。乗員たちは子供の様に泣いていた。

長門はG.I.に呼ばれ本部へ向かった。消されるのを覚悟で。

しかし彼女が想像していた事とは違う結果が出た。

引き渡された艦達は消さない。

しかし二度と軍に関する事柄には関わらないことを条件に生きること許された。

そして軍刀と短剣を没収され、書面にサインをさせられ解放された。

「長門」

名前を呼ばれた。

門の前に佐藤が立っている。

軍服ではなくワイシャツ一枚に濃紺のズボンというラフな格好で立っていた。

「どうやら無事らしいな」

「おかげさまで」

「こないだの話、考えてくれたか？」

「あなたの田舎にいつしよに住むって話？」

「ああ。よく覚えてたな」

「そうね。行く場所もないし、行ってみようかしら」

「そうか。なら行くぞ」

そう嬉しそうに言って駅へ向かった。

九州まで長時間の旅が始まった。

だが、二人とも何も話さなかった。

その町は静かで波の音が聞こえる場所だった。

佐藤は貯めていた金で船を買ったそうだ。

「漁師やってるのね」

「まあな。畑よりは楽しいぜ。結局、俺は海に出ないと気が済まないらしい」そう言って笑った。

彼の家は慎ましいという言葉が似合う家だった。

長門は庭に面する部屋をもらった。

持ってきた荷物は着物と帯がいくつかと手紙の束と書道具だった。

長門は毎日のように写経をして過ごした。

佐藤は朝が早い。

長門は佐藤が起きる前に起き、ぎこちないながらも食事を作る。

佐藤は美味いと言ってそれを食べる。

その日も漁から帰り網の手入れをしながら彼が言った。

「子供たちに習字や勉強を教えたらどうだ」と。

驚いたが、後ろを向き続けることに飽いていた彼女は、「良いかもね」と答えた。

それから数日後、近所の子供たちが集まった。

始め緊張したような顔をしていた彼らだったが、だんだんと楽しそうに藁半紙に字を綴っていく。

何かない限りその日以来子供たちの声が響き始めた。

子供たちの親は長門にも佐藤にも親切にしてくれる。

戦争が終わったばかりで皆、金がないので畑で採れた野菜をくれる。

物資も僅かだというのに。

毎日の生活のハリが出てきた。

長門の笑顔が増えてきた。

それを見て佐藤は嬉しそうだった。

「なあ、長門」

「なに？」

「俺たち、一緒になろうか」

はにかみながら佐藤が言った。

「ちよっと。私は人間じゃないのよ？」

「知ってるよ」

「知ってるなら尚の事……」

「もう良いんじゃないか？」

「え？」

「忘れる事はできない」

「そうね」

「でも俺たちは共有できる。あの時どんなに辛かったかも誇らしかったかも……」

「それから！」佐藤が吐き出すように言った。

「俺は！お前さんが好きだったんだよ。人であろうがなかろうが関係

ねえよ！」

そう言っつてむすつとした。

照れている。というのが分かる。

くすくす。長門が笑い出した。

「そうねえ。考えてあげてもいいわよ」

そう言っつて笑った。

初めて人の幸せというのが何なのかわかった気がした。

人の幸せというのは、一番大事な人と同じものを背負い、慰めあい、

高めあう事なのだ。

長門は子供たちやその親と交流することで人の本質を見た気がした。

人間も捨てたものではないなと思った。

それから数日後、書き溜めた写経を近所の寺へ奉納した。

住職の話聞き、自分の話をした。

住職は長門の正体を聞いても驚かなかった。

長門は初めて泣いた。

住職は泣き止むまで手を握ってくれた。

その手は暖かかった。

そして、長門は決めた。

佐藤と一緒に生きていこうと。

人ではない。

戦艦の魂が人の形として具現化しただけのいつ消えるとも分からないものだ。

だけど、長門はそれでも一緒に生きていたいと思った。

消えてしまうまで一緒に生きていくことを決めた。

先に佐藤がいなくなるかもしれない。

でもそれでも一緒に生きていくことに決めたのだ。

死んでいった仲間たちの分まで幸せになろう。そう決めた。

帰ると佐藤に自分の気持ちを話した。

一緒に生きていくと。

佐藤はとても喜んだ。

それから数か月後、細やかな婚礼が行われた。

ただし、役所には婚姻届は出せない。

それでもよかった。

子供たちは長門の姿にはしやぎまわり親たちは「幸せにね」と祝福してくれた。

そのあと子供たちは長門の教室に通い続けた。

後日譚にはなるがその中から優秀な役人が出た。

長門も幸せだなと思った。

素直にこの光景を喜ぶことができるようになった。

子供がいたら楽しいだろうなあ。とも思う。

まず子供ができるかは未だわからない。

それは神様にしかできない仕事だろう。

「ねえ、雄一さん、もし子供が出来たらどうする？」

夕飯時にためしに聞いてみた。

「そりゃ、嬉しいに決まってる！なんだ？できたのか？」

と嬉しそうにしたが、彼も子供は望めないと分かっている。

でも、長門と一緒に生きていくことが嬉しいらしい。

長門も嬉しかった。

「私は幸せだわ」

そう言って茶を飲んだ。

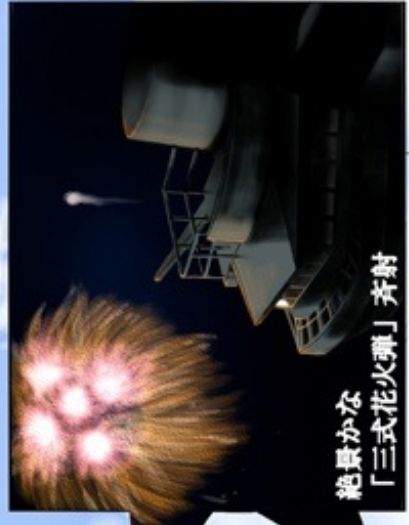
それから数か月後、庭の桜の花が散り始めた頃、奇跡が起きた。

了

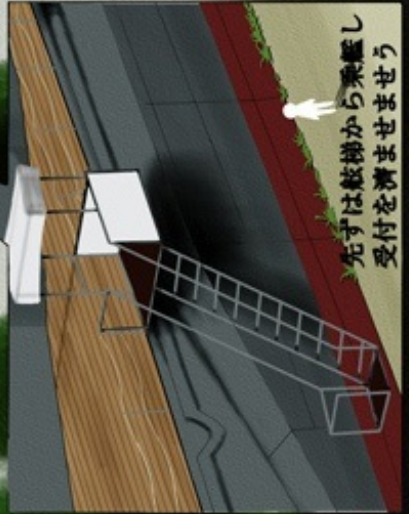
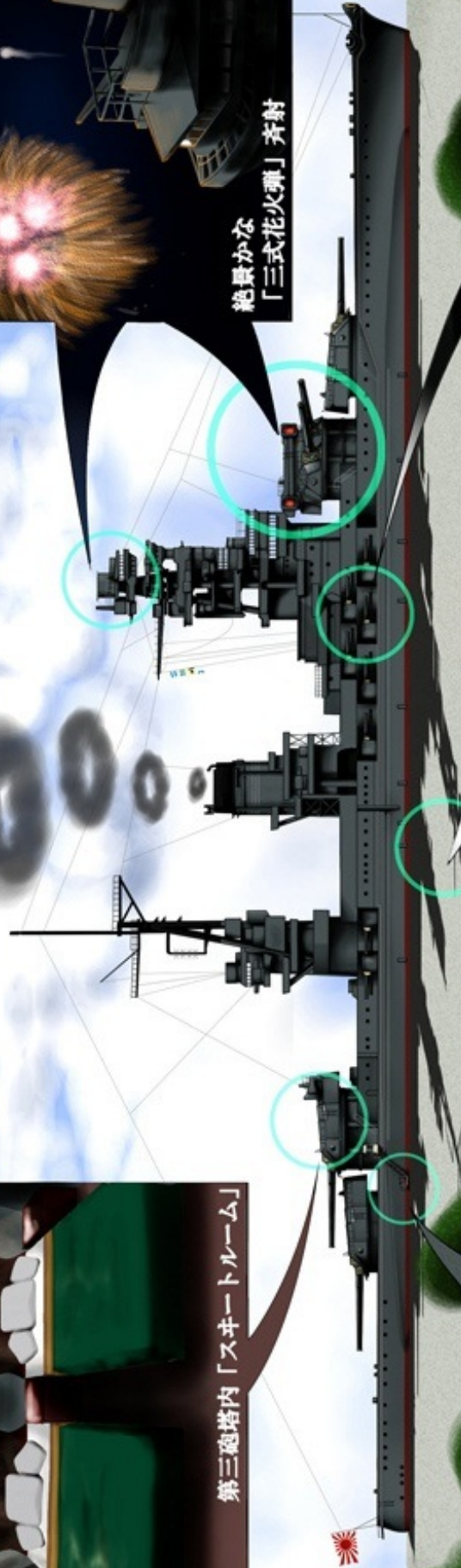
戦艦長門に泊るから!!!



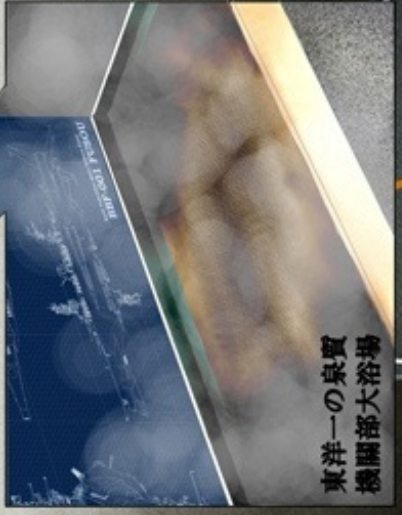
第三砲塔内「スキールーム」



絶景かな
「三式花火弾」斉射



先ずは舷梯から乗艦し
受付を済ませませう



東洋一の泉質
機関部大浴場



副砲型天体望遠鏡で
大宇宙の旅へ

軍艦長門見学記

煤渡

やあ、みなさん軍艦長門見学のためにお集まりいただきありがとうございます。

私は、今回皆さんの見学を案内いたします、航海科の小松 守と申します。中尉です。本日はよろしくお願いいたします。

今から、みなさんを我らの戦艦長門にお連れいたします。その棧橋から水雷艇に載っていただきまして、錨泊中の長門に乗艦頂く、という寸法です。

ええ、大きいフネですのでね、中々棧橋で丁度いいはありませんのでね、ホラ、聯合艦隊なんかも瀬戸内の柱島に停泊しますでしょう。それは大型艦用の棧橋というのとはなかなか数が少ないからなのです。ですので、ちょっと皆さんには長門まで艦載艇でお越しただく、ということになりました。御了承下さい。

さア、ではみなさんこちらのパンフレットをどうぞ。長門の案内です。艇の到着までいましばらく時間がありますので、そちらをご覧ください。

『軍艦長門案内』

常備排水量、三三八〇〇トン

全長、六六〇尺（二〇一メートル）

全幅、九〇尺（三〇メートル）

速力、二十三ノット（一時間十里二十八丁）

兵装、四十五口径四十一センチ連装砲四基、五十口径十四センチ単装砲二十門

主砲の弾丸、体重十五貫（五十六キロ）の人間十七人分 一発あたり四千円

艦尾の「ながと」の金文字の大きさ、径四尺（一・二メートル）

錨の重量、二二〇〇貫（八二〇〇キロ）

乗員、一三〇〇人

一食で牛一頭半、魚四十五貫、米麦二石、野菜七十五貫を消費する

艦内の電燈の数、二四五〇個、イルミネーション用一三三一個

中々いろいろなことを書いていますでしょうか？がんばって皆で作ったのです。今日の記念品としてお持ち帰りください。こんなに書いて大丈夫かって聞かれる向きもありますが、大丈夫です。フネの性能というのは意外にも結構な部分が見えから推測できるのです。その気になれば、写真を分析するだけで速力なんてのも分かったりします。まあ、外国は既にこの程度のことはお見通し、というわけです。しかし、性能を真に発揮させるのは人でありますから、そこをちやアんと抑えて訓練しております我々はぬかりありません。よって、御心配には及びませぬ、というわけですね。

ああ、みなさんの乗る艇が到着したようです。ではこちらにどうぞ。

みなさん、艇が走っておりますので大声にて失礼しますねー！

今一、艦尾に見えるのが一、大きな「ながと」の金文字ですー！直径四尺ほどの大きさですー！でっかいでしょー？はい、では、今から一、ぐるっと回りまして一、左舷から上がってもらいまーす！

はい、止まりましたね。えー、ここが長門の玄関口、左舷の舷梯になります。今こうやって、水兵たちが竿に引っ掛けて下まで持つて行ってくれますので、指示がないうちは座ってお待ちください。・・・転ぶと海に落ちますよ。ああ、そこのお嬢さん！危ないので座って！えー、油断するとベテランの水兵ですら海に落ちる場合があります。ですので、はい、今のうちに注意事項を申し上げます。舷梯を登る際はゆっくりでもいいので脚など滑らせないように、確実に登って行って下さい。念のため舷梯の下にケンバスを張っておりますので、安心して足元を確認してください。えー、我々の場合は張ってもらえませんが・・・あつははは。

・・・さあ！どうぞ上がってください。上に上がりましたら、舷門番兵の指示に従い、お名前とご住所のご記入をお願いします。また、機密保持のため、手荷物検査にご協力願います。

さて、皆さん改めて、ようこそ軍艦長門へ。

海軍の誇る長門型戦艦の一番艦、世界のビッグセブンのうちの二艦になります、この戦艦長門は、広島は呉の生まれにございます。八八艦隊計画艦第一番艦として大正五年（一九一六年）の帝国議会で建造が承認されたのちに、大正六年（一九一七年）八月二十八日に起工、大正八年（一九一九年）に進水いたしました。建造にかかったお金はおよそ五千万円、同じ時期に建てられた丸ビルとほぼ同じお金がかかっております。大きさは、全長二一〇メートル全幅三〇メートルあります。推進軸は四、すなわち、四つのスクリューがフネの下ではグルングルンと回り、速力二三ノットで長門は走ります。そして、この大戦艦のなかには一四〇〇人が乗り組んでおり、日夜訓練に励んでおります。

さて、大まかな説明はここまでとしまして、後は実際に皆さんに見てもらいながらご説明いたします。では、皆さんこちらへ・・・

さあ、ではまずこちらの大きな砲塔、この長門を世界のビッグセブンならしめている四〇センチ主砲をご覧下さい。大きいでしょう？この、皆さんに見ていただいている部分だけではなく、艦内にも色々な機械を含んだ部分がありまして、装甲の重さも含みますと、砲塔一つでちよつとしたフネくらいの重さがあります。駆逐艦程まではいきませんが、それより少々軽いフネ程度はあります。そして、これらの砲塔及び砲の動力は水圧です。この砲でおおよそ一トンある砲弾を四〇キロメートルのかなたまで飛ばすわけです。一斉射撃では連装四基八門の砲から八トンの砲弾が飛び出すのです。

発射の際の音、というより衝撃波は凄まじく、キチンと備えておりませんと、まともに受けてしまった場合は帽子は飛び服のボタンは皆破れてしまいます。凄いものでしょう。これはあくまで、艦橋一番上にいた場合のお話です。では、砲塔の近くにいた場合はどう

なるのかと申しますと、以前長門よりも古いフネで実験したことがございます。かの地震学者の大森博士が、主砲発射の衝撃を数値化したというところで、主砲の真下に地震計を据え付けたことがありました。さあ、結果はどうなったかと申しますと、旧式のフネの主砲でも衝撃は凄いもので、備え付けたはずの地震計はどこかに吹き飛んでしまい、数値はわからずじまいであったとのこと。このように、主砲発射の際は衝撃波を人間が喰らったらひとたまりもありませんので、発射の際は三回ブザーを鳴らして知らせるとともに、露天甲板上から人員を退避させます。さもなくば、衝撃で内臓をやられ仏様になってしまいます。

え、サンチって何だ、センチじゃないのかって？ああ、これはですね、海軍では最初にフランス海軍に学んだもので、昔の名残でフランス語でサンチと呼び習わしておるのです。英国に学ぶようになってからも、日本独自で進めるようになってからもこの呼び方は変わりません。

ま、昔からの伝統で残っている慣習なんてのは探すと意外にあるもんですね。たとえば、「ヨーソロー！」なんて掛け声、聞いたことありませんか？あれは、江戸の頃のなごりで「よろしゅうござさうろう」が訛って転じ「宜う候」に、そして、今の「ようそろ」へと変わったものと言われております。

つぎに、艦橋をご覧ください。複雑な形をしておりますあの橋楼がこの長門というフネをつかさどる頭脳です。艦橋や方位盤、射撃指揮所や探照灯を備え、文字通りフネのトップです。高さは露天甲板からおよそ三〇メートル、喫水線からだ四〇メートルあります。伊勢型や扶桑型戦艦とは違い、六本の支柱が中央の大きな柱を支え、そこにブリッジを何段にも重ね合わせるようにしております。少々やられたとしても、丈夫ですので、十全に戦闘能力を発揮できる構造なのです。また、このように高く複雑な形をしておりますので、橋楼内部にはエレベーターを内蔵しております。ただし、指揮官専用でして、一般の乗組員は使用を許されておられません。ですので、自分も乗り心地はご説明いたしかねます。御容赦ください……

なぜあんなに高いところに艦橋や射撃指揮所を設けるのかと申しますと、長門の甲板上からだと、測定できる水平線までの距離は二〇キロメートルとなり、主砲を射程一杯で撃つ場合は弾着を視測できません。そこで、指揮所を三〇メートルある艦橋の上へと移し、ここから八門の主砲を統制するようにしている次第です。

さて、お次は皆さんの足元をご覧ください。露天甲板には木材を張っております。さあ、ここで問題。ここに張られているのは何の木でしょうか？・・・うーん、難しいかな？そこのご婦人はいかがです？・・・檜ですか、惜しいですね。

長門のデッキに張ってあるのはチーク材です。舶来のいいものですよ。幅は十五センチ、厚さは七十八センチぐらいです。普通なら家の柱ぐらいには使えそうなものがここに敷き詰められているのです。何でこんなに丈夫なものにするかと申しますと、潮をかぶるからというのがひとつと、毎日水兵の甲板洗いがあつたわけですね。ええ、水に強くするためなのです。

ああ、国産の木材使わないのかつて？いやあ、試験的に阿里山のヒノキを張ったこともありましたが、やはり、フネに使う木材ではチークに勝るものはないようです。潮に強い木つてエのはなかなか見つからないもんなんですなあ。と、いうわけで、先ほどのご婦人の回答はあながち間違いではなかった、というわけです、はい。もし、檜風呂に飽きたら次はチーク風呂なんてのもいいかもしれませぬねえ。

では、艦首の方へ向かいましょうか。

はい、こちらが長門の主錨・・・の鎖です。なにぶん、錨は外側についておりますので、ここからですと、直接見ることは叶いません。ですので、退艦の際や、停泊中にご覧下さい。間違つても、舷側から身を乗り出したりなさいませぬようにお願い申し上げます。万が一、舷側から落ちた場合、およそ一〇メートルの高さから海面に叩きつけられることになりまますので、無傷というわけにはまいりません。ご注意ください。

さて、錨本体の説明に移りましょうか。長門の錨は二二〇〇貫、つまり八二〇〇キロの重さのものが艦首に二つ備え付けられています。それを支える鎖は一節がおよそ一〇メートルあります。軍艦が港に入る時は、「錨用意」の号令がかかり、担当の分隊は投錨の準備に入ります。そして、投錨位置に艦首が達した時に、航海長から艦長に「投錨よし」と報告されます。すると、艦長はただちに「投錨一つ」と大きな声で号令します。すると、分隊はストッパーを切りまして、一〇トンの大錨が錨鎖を引き摺り一〇メートル下の海面に投下されるといふわけです。

あとは、天候に合わせて錨鎖の長さを調整して、艦の安定を保ちます。これは、我々航海科の役割です。何故錨鎖の長さを調整する

のかと申しますと、錨はその重さだけで艦を支えているわけではなく、錨と錨鎖の海底との摩擦で艦をつなぎとめます。よって、荒天の際にはより長く錨鎖を繰り出す必要があるのです。

・・・さて、ここで問題です。我々は繰り出す錨鎖の長さを決めなくてはなりません。どうやってその長さを求めているのでしょうか？・・・はい、そのお嬢さん、手を挙げるの速かった！ってわけでどうぞ。・・・はは、残念、勘ではないのです。はい、ちゃアんと計算によって求めています。繰り出す錨鎖の長さ $L(m)$ は水深 $D(m)$ に対して $3D+90$ で表され、荒天時は $4D+145$ で表されます。ふふ、意外ですか、我々ネイビーはスマートに物事を解決しなくてはなりません。錨もまた然りなのです。

サテ、ちよつと中に入ってお部屋拝見といきましょう。ラツタル・・・階段が急ですので、気をつけてください。あせらずに、ゆっくりとでイイですからね、下の甲板に降りた人は一旦そこでお待ちください。下手に動く艦内で迷子になってしまいますからねエ・・・

・・・全員おられますね。さ、無事に皆さん揃ったところで、部屋の説明に移ります。ここが私たちのような下級士官の公室である、士官次室です。下級士官と言いますのは、航海長や砲術長のようにナントカ長とつかない海軍兵学校、海軍機関学校、海軍経理学校つまり、海軍三校卒業の中尉や少尉のことを指します。

この士官次室の通称は「ガングルーム」と言います。これもまた、ロイヤルネイビーに学んだ名残でして、かつて水兵の反乱防止のために武器庫の隣で警備を兼ねて下級士官が寝起きしていたことから、下級士官の公室が銃の部屋、つまりはガングルームと呼ばれるようになったのです。ま、我々帝国海軍では水兵の反乱など起きようがありませんので、名前だけなんですけどね。我々なんかは「雁室」なんて呼んだりもしています。えー、何故かと申しますとですねエ、独身者ばかりでして、ま、独り身の寓意も含んでいる次第です、ハハハ・・・ハア。

さつ、気を取り直して次行きましょう次。えー、こちらが士官次室士官私室、つまり我々の寝床です。二人部屋で、寝台は二つあります。寝台の下はこのように引き出しがついていて、被服入れになっています。その他の設備は共用です。長門は大きなフネですので、他艦に比べて間取りがゆったりしていますので快適なものですよ。

では、他の部屋のことも説明してしましますね。先ほどは士官次室をご説明しましたが、次室とあるからには士官室もあります。これは、副長、航海長、砲術長、機関長、軍医長、主計長といった、ナントカ長つまり、分隊長以上の士官の公室です。これらの方々

私室は一人部屋で、部屋には机、いす、寝台があり、洗面所や鏡に至るまで便利にできております。

では、長門の乗組員の大部分を占める水兵の部屋は、となりますと・・・こちらです。

このように共用の大部屋で寝起きして居るんですね。ほら、綺麗にネツチング・格納棚に片付けてありますでしょうか？海軍では躰教育も行き届いておりますから、水兵の部屋といえどもこのように綺麗なものです。外国の映画にあるような、汚い船室で髭もじやのむくつけき野郎どもが暴れるようなことはないのです。長門では綺麗な船室で髭は・・・いますが、スマートな男達が日夜訓練に励んでいるのです。

先ほど、分隊長とかいう言葉を遣いましたが、分隊とはなんぞやと申しますと、divisionの訳でして、この下に班を置きます。陸サで言うところの中隊のことですネ。長門には第二十一分隊まであります。駆逐艦ですと分隊が四つしかないことを考えていただきますと、長門がいかにか大きく、多くの人間が乗り組んでいるかお分かりになるかと思えます。

この分隊がどのような役割をしているかと言いますと、各分隊でお仕事を分けておるのです。たとえば、第一から第四分隊は各主砲の砲塔員です。ちなみに砲術科だけで第八分隊までありまして、砲術科分隊と呼んで砲術長がそのすべてを統括しております。ちなみに、私たち航海科は第十分隊で、分隊長は航海長です。この中には、操舵員だけでなく、信号員など、航海する際に欠かすことのできない人員すべてが含まれております。フネの仕事一つとっても多彩なものでしょう？これらそれぞれの仕事の一つとなった時に初めて、この巨大な長門という戦艦が全力を発揮します。そのためには日夜の訓練が大切なのです。

さて、訓練するにも腹が減ります。ですので、食事も大切です。ここでちょっと一般的な長門の水兵の献立を御紹介しますね。

朝食は、麦飯、みそ汁、つくだ煮、漬物などです。

昼食は、麦飯、牛肉汁またはライスカレー、たまにパンが出ます。祝祭日なんかですと、赤飯やぼた餅も出ますよ。

夕食は、麦飯、魚、煮物、漬物などです。

一通り聞いただけでも、バランスがとれていることがお分かりになると思います。健康な体で全力を発揮するために、常に最新の栄

養学を取り入れて献立を立てています。陸サンでは主計兵のことを飯たき兵なんて馬鹿にされる向きもありますが、海軍では食事一つとってもサイエンスに基づくものであり、彼らはテクノクラートなのです。

ちなみに、長門の乗組員は一四〇〇人です。一食で牛一頭半、魚四十五貫、米麦二石、野菜七十五貫を消費します。眼のまわるような数字ですね。これらを毎食毎食造る主計兵には本当に頭の下がる思いです。そして、これらを艦内にすべて収めてしまえる長門の懐にも感謝ですね。

さてと、長門の懐に入っているのは人間の食事だけではありません。長門自身の食事、つまりは燃料も入っています。長門の燃料はなんでしょう？・・・はい、その奥さまどうぞ・・・石炭、惜しい。実はもう一つあります。ハイ、そのお嬢さん・・・油、はい。長門の燃料は重油と石炭です。両方で長門は動いております。軍艦の燃料は石炭だけの時代から重油と石炭の混載になり、いずれは重油だけになるのではないかと思われ。この長門もいずれは重油だけで動くようになるでしょう。その先は・・・今後の科学がその行く末を決めます。

この石炭ですが、炭坑から出てくるような黒い石のものではなく、特殊な練炭が使われています。煙が少なく、火力の強いものにして、大きさは重箱ぐらいで、一つ四キロ半あります。大変優れた燃料ですが、ピッチ、つまり硫黄分が強く素手で扱くと皮膚が爛れます。機関科の兵員はいつもこのような燃料を扱っており、また、燃料積み込みの際には各分隊総出で扱います。みんな真黒ですよ。

ちなみに、兵員も大喧らいなら長門はもっと大喧らいでしてね、高速力で一昼夜航海すると六万五千円分の燃料を食います。ま、十日で六十五万円ですな。以前、長門に見学に来た富豪が寄付で何杯フネが作れるか質問した時がありました。はつきり申し上げまして、この長門を数日全力で走らせれば、富豪の土地建物は大体無くなってしまいうようなほどです。燃料代、維持費だけでも戦艦とはビッグなのです。

さて、時が過ぎるのは早いもので、予定終了時刻となりました。今日の長門見学はここまでです。皆さんお疲れ様でした。ずいぶん歩き回ってお疲れでしょう。これから、来た時間様に艦載艇で棧橋までお送りいたします。その前に一旦締めさせていただきます。

軍艦は作るのも大変ですが、動かすのも大変です。これもみな、帝国臣民皆さんのご理解あってこそそのものですから、海軍の活動を理解していただくこうとこのような見学会を機会あることに開催しております。そして、本日はその一つ、軍艦長門見学会にご参加いただきありがとうございます。皆さんの生命、財産を守るために海軍は存在しております。本日の見学会が海軍に対するご理解の一助となれば幸いです。

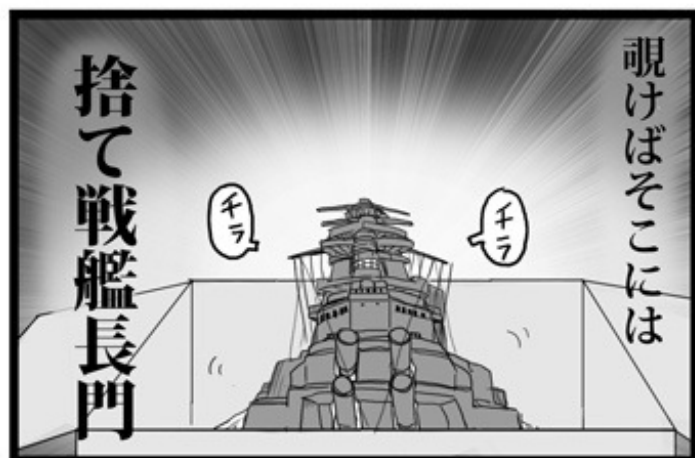
では、艦載艇に乗りましょう。舷門はこちらです。

・・・いかがでしたかお嬢さん、皆さん。またお会いできる日を楽しみにしております。今度はお知りあい、お友達もお誘い合わせの上どうぞいらしてください。長門は良いフネですよ。

了

軍艦長門の日常

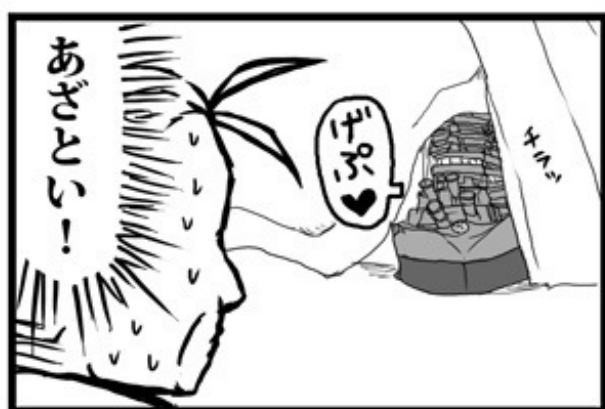
アモアアモ



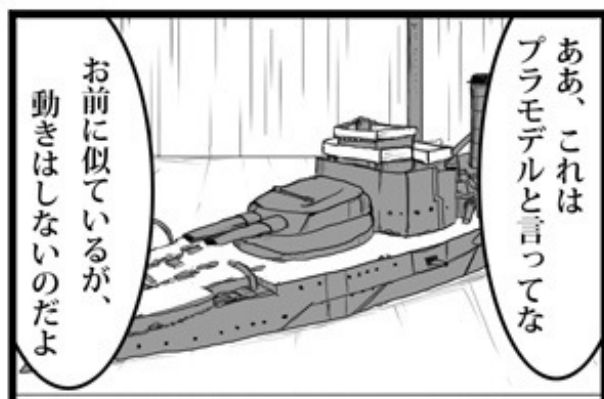
人懐っこ戦艦ナガト



ちらり戦艦ナガト



おともだち作戦



乙女艦ナガト



大家さん襲来セリ



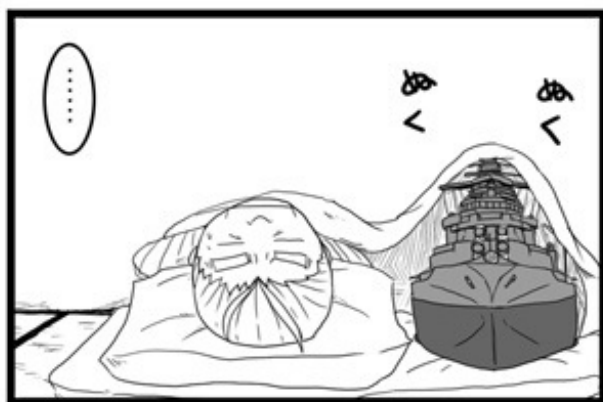
突撃！隣の聯合艦隊



増殖戦艦ナガト



スキマ戦艦ナガト



おかえりなさい ただいま

たま

「長門チーフ。この資料、これでよろしいでしょうか。」

若手の独りが、長門に決済を求める。呼ばれた『長門』は、暫し、書類を読み込み、赤ペンでチェックを入れる。

「このこと。ほら、この表現も直せ。後、この個所をもっと突っ込んで書いて。他の資料も全部直すぞ。」

「この金額違っている。計算し直せ。」
この件で請求する口座は、別の、そうだな、一般事業のヤツにしる。監査が来週だから、それまでに資料を提出できる状態にしておくように。」

渡された複数の案件を同時並行で捌いていく長門は、スタッフの中では『鉄の処女』^{アイアンメイデン}と言われている。

少しも揺るがず、私情を交えず職務を遂行する姿と、外見が中々の美女ということも相まってつけられたあだ名である。その仕事ぶりから、尊敬し、慕う者と、全く隙が無い謹厳実直の態度から近寄りがたいと思っているものもある。しかし、好評・不評様々であるが、仕事ができるのは確かだ。現に、机の上で山積みになっている書類が、長門に渡すだけで、一

時間あれば、大半は終了している。

定時のチャイムが鳴り、30分程たつと、仕事のキリがつく者が出てきた。

「忙しい時期ではないし、今日は上がるのか。私は、宇垣課長へこの定時報告書を出してから上がるぞ。」

周りの空気を讀んだ長門は、書類から顔を上げてスタッフに伝える。トップが書類を出して帰るといので、さっさと帰宅する者も出た。最近は何分か改善されたが、空閑期でも定時以降に残業する者は少なくない。

しかし、それでは、自分の心身の調子が狂ってしまうし、職場環境も悪化してしまう。その為、この企業の管理職は、周りの状況を判断して、早く帰るように声掛けをしている。時には、自分達が率先して帰り、周りのスタッフを帰りやすくするようにしている。逆に中々としても仕事が終わる事ができなそうな者がいた場合は上司達が手伝う事もあった。人一倍スタッフ思いである長門は、いつもスタッフ達がよりよく出勤できるように、気にかけて、行動している。

颯爽と長門が部署を出て行った後、職場に残っていたスタッフの一人は、長門の机を見て感嘆する。

「おい、長門チーフの机、あれだけあった書類がもうないぜ。」
「ああ、凄いな。明日ももつと届くのだろうな。それも一日で片付けてしまえばいいぞ。」

「文書決裁は早いし、現場に出ても、十分に対応できて予想

以上の成果を上げてくる。お偉いさんの交渉事も上手い：。
向かうところ敵なしだ。」

『才色兼備』っていうのかな。流石、我らが皇国の海の守り『戦艦 長門』だ。」

夕暮れの廊下を長門は、歩いている。通行人がいたら、うら若い女性が歩いていると見るだろう。だが、その正体が伝説の超弩級戦艦だとは、大抵の者は夢にも思わない。

先の大戦時に就役された戦艦や戦車という兵器は、人々の畏敬の想いが凝り固まり、いつしか『魂魄』をもつようになった。物体が魂魄を持ち、いつしか『人』として活動するのは、過去に植物や城や館、都市などという例が何度かあり、珍しくはない。実際に存在している者すらいる。中には『国』や『地方』も『魂魄』を持ち『人』として存在している者もある。こういった『魂魄』は『化身』と呼ばれた。中でも軍艦の『魂魄』は、『艦魂』^{ふなだま}と呼ばれ、旧海軍においては、中佐から少将相当の待遇を持っている。

そして、この話の主人公を務めている長門という女性も海軍で海の守護神という異名を馳せた「戦艦長門」の『艦魂』であり、現在は国内外を問わず世界中を、スタッフを率いて飛び回っている。

長身を翻えし廊下をきびきびと歩いている長門は、硬質な顔と鋭い瞳が相まって、男装の麗人と見えなくはない。まだ、暑さの残る日なのにきつちりと上着の釦を止めている姿は冷厳なる威圧感を出し、すれ違う人々は立ち止まり、通路を端に避けていく。しかし、中には、嫌悪、畏怖といった眼差しを長門に投げかけている者もいる。人々の姿に軽く会釈を返し歩く長門の心の中は、軽い蟬りが顕れた。

（何故、恐れるのだろうか。私は、『皇国の海の守り』として生まれ、その宿命のもとに過ごしてきた。人々は、私がいつかは、「人を殺す武器」として暴走するとか考えているのだろうか。普通に過ごしていたのに・・・。）

答えが出るわけではない暗い考えをつらつら考えながら、宇垣課長のいる部署へ向かった。

宇垣課長の部署は、すでに他のスタッフは帰ってしまい部屋には、宇垣が一人で文書に目を通していた。部屋に入り、まずは、宇垣へ向けて敬礼する。

「長門、ただ今、参りました。遅れまして申し訳ありません。」「こつちから来てつてお願いしたのだから。敬礼をする必要はないわ。そうかしこまらないで。ほら、ここに座って。」

旧海軍時代の作法どおり、上官に敬礼する長門に、妹を見ようような目線で優しく笑いかける宇垣。勧められた椅子に座りながら、その優しい眼差しを浴びた長門の胸には先ほどま

でのもやがて消えていく。

(あいかわらず、綺麗な方だ・・・お姉さま。)

長い黒髪を軽く束ねて後ろに流し、顎わになった両耳にはシルバーのピアスが光っている。白い小さい顔には、切れ長の黒い瞳、中心にすっと通った鼻筋、桜色の唇。『端麗』という言葉がそのまま擬人化したようなこの女性であるが、これでも旧海軍士官である。現代では、長門を含めた『艦魂』の責任者として、指揮の取りまとめを行っている。

現代のたおやかな姿では、猛々しい海軍士官という言葉が似合わないが、戦時では冷静沈着な司令官に変わりその指揮的確さは、『艦魂』たちにとつては最も頼れる上官である。

旧海軍時代から、長門を初め、他の仲間の事に対して気にかけてきてくれた士官の一人であり、『艦魂』の仲間の中では、宇垣のことを「お母さん」とか「お姉さま。」と慕っている者がいる。かく言う長門もその一人であるが。

長門から文書を手渡された宇垣は記載している文章やグラフに目を通し、その内容に対して、長門に質問する。かなり鋭い質問もあるが、長門は答え、確認することがあった場合は、後日調べて再度、資料を持ち込むことにする。そういったやり取りを2、3回くり返し、資料のチェックが終わった。今迄目を通していた資料を机に置き、視線を目の前にいる長門に戻す。

「はい、終わり、お疲れさま。今回の出張は長かったわね。」

「ええ、国外から国外への強行軍でしたので、本国に戻ることができませんでしたから。私より、家族がいるスタッフの皆が不憫でした。」

「あら、君も大変だったでしょ。かなりの強行スケジュールの後、すぐ出社したし。遅くに来てもらって言うのもなんだけど、少しは代休を取りなさい。身体の休養も職務の内よ。」

仕事と言わなければ、満足に休む事をしないワーカーホリック気味な自分を気遣う宇垣の心遣いに感激する長門。ほんわかした空気になった時、軽くノックの音が響いた。宇垣が返事をする前にドアが開き、幼い男の子が入ってくる。

「ちよーかん。おしごとおわたのく。ぼくもちあきせんせのしゆくだいお」わったよお。」

室内にとことこ入ってきた子供の気配を読み、長門は軽く息を呑む。驚愕する長門に対して、宇垣は軽くうなずき。

「宇垣さん・・・この子は。」

「ええ、戦艦『大和』よ。先の大戦で沖縄の海に眠っていたこの子が覚醒してきたの。」

「なんと・・・。」

かつて、自分が戦艦としての全てを教え、連合艦隊旗艦の職務を譲ったあの子に再び会えるとは。宇垣の机に近づく大和を間近に見て、育ててきた戦艦に再会できた喜びで感激のあまり大和に駆け寄り、抱き上げた。

「大和、よく戻ってきたな。私だ。長門だ。覚えてるか。」

これから、また一緒に航行しような。」

感動の再会となるはずであったが、長門にいきなり抱き上げられるという行動に大和は大きい瞳を真ん丸にし、固まってしまった。

「ふ、ふえ、ふええええええええええ。」

見知らぬ女性にいきなり抱き上げられるという行動に大和の頭が追いつかなかったのだろう。抱き上げられた腕から逃れようと、大和は身をよじり、長門の腕に足を蹴りつけ、逃げ出そうとする。慌てて大和を下した長門。宇垣は大和に近寄り、抱きしめた。

「ほら、何怖がっているの、お前のお姉さんの長門よ。」

宇垣にゆすり上げられ徐々の落着きを戻す大和。

「ひく、ひく。だ、だって……。こわいのだもん。」

「怖くないわよ。私たちを守ってくれるお姉さんよ……。森下君が戻ってきたようだよ。あっち行って遊んでもらいなさい。森下君、お願い。」

宇垣一人かと思ったが、直属の部下である森下が余所からか戻ってきた。森下は、宇垣の他に泣きじゃくる大和、茫然としている長門を見て、大体の事を察し、大和を宇垣から貰い、部屋の外に出て行った。

二人の気配が完全に遠ざかった事が判ると、長門の方へ向き、頭を下げた。

「長門、ごめんなさい。悪い気持ちにさせてしまったね……。」

大和はね、人見知りか激しくって、ちよつとの事ですぐ泣き出すのよ。」

謝罪が耳に入らないのか、長門の顔色が段々青白くなり、表情が曇ってきた。影が差しこんだ表情の長門が心配になり、手近な椅子に座らせ長門の手を優しく握る。

「大丈夫よ。あの子は、森下君や千秋君の時だって、かなり大泣きしたわ。泣いて人見知りが終ると人懐こい大和に変わるの。」

長門の背をさすり、大和からの拒絶から立ち直ろうとしているのを支える。宇垣の優しさが身に染みて、口元にわずかなばかりの笑みをつけ頭を下げる。

「宇垣さん。ありがとうございます。もう大丈夫です。いえ、私が考えていたのは、別な事です。」

口元の笑みが悲しげな笑みに変わり、顔中に広がる。切れ長の瞳から一粒涙がこぼれ落ちた。慌ててハンカチでぬぐう。「私たち軍艦は、戦う為に生まれてきました。守る為の武器として存在していましたが、結局、人を殺すと同じ意味です。」

一般人にとってはただの『凶器』と同じで、周りから恐れられてきました。

大和に対して、昔から、立派な戦艦にしようとして、教育していましたが、私を見るとあの子は逃げてしまいます。曇りない無垢なあの子が見る私は、人を殺し、血を吸う化物に見えるから、怖いと思っているのではないかと。」

ぼつり、ぼつり喋る内に余計しよげてしまい落込む長門。普段、スタッフに毅然と接している姿が想像できない程弱しい姿だった。

一部の人間が、長門達を『凶器』として自分たちにあだなす脅威として蔑視していることに、昔から少し思う所があった。長年の間、それは積み重なっていったが心の奥底に仕舞い込んでいた。だが、大和の人見知り癖が糸口になり、彼女が抱えている心の鬱積が吹き出してしまったのだろう。

『皇国の海の守り』という大役を担っている彼女の内面がかなり脆くなっている事を先程の会話で宇垣は察する。

自分の宿命を変えることはできないし、ましては他人の宿命を変えることができないなんてもつての他だ。

だが、このままでは彼女はいずれ潰れてしまう。なんとかしなければ・・・。

長門の背に腕をまわし、幼子に言いきさせるように、宇垣はなだめる。

「それは、違うわ。貴方は凶器でない。『凶器』になるのは、その物の存在ではなく、使う人の心の気持ちによって、なりえるの。」

私たち海軍士官を初め、他の皆も、貴方が守ってくれらると確信できたから、最後まで戦い抜いたわ。その気持ちは、現代でも同じよ。貴方のスタッフたちだって、無償の信頼をトップに置いているから、こんなに良好な実績を築いているの

よ。この気持ちは、『凶器』と恐れられている存在に率いられたチームでは残すことはできないわ。」

背中を撫でさすりながら、一言、一言かみしめように言い含める。自分を、『価値が無い』『人を傷つける破壊兵器』と卑下する心を救うように。長い間、細かく傷付けられた個所をそつと癒すように話を進める。

「大和は、戦艦として教えを貴方から忠実に学んだわ。そして、連合艦隊旗艦としての矜持をあの子もしっかり受け継ぎ、自分の役割をきちんと果たした。だからこそ、現在に艦魂として還ってきている。」

自分がやった事は誤りであったかというのは、誰でも悩むけど、少なくとも、戦艦の化身としてあの子がいるという事は、貴方のやった事は正しかったという証なのでなくて。」

やってきた道が間違えていたかと迷っているから心が弱まる。自分のやってきたことは正しかったと自信をつけさせようと、長門の気持ちを読み込み、宇垣は慰めた。

宇垣の話を聞くうちに長門は、しよげていた顔が次第に赤くなり、宇垣の肩に持たれた。長門の固く閉じた目から涙が幾筋もこぼれ落ちる。

「・・・ありがとうございます。すいません、暫くこのままにしてもらうていいですか。」

「ええ、好きなだけいいわよ。」
「ありがとうございます・・・お姉さま。」

普段、心の中で呼んでいる呼び名がぼろっと出た。普段なら焦って言い直すが、今はそんな心の余裕がない。涙は、心の澱を洗い流す。宇垣の肩に持たれた長門は、両目から心の蟠りを押し流したのであった。

ようやく、落ち着いてきた長門が、涙の後を拭い、人心地がついたので、そのまま退出する。すでに、辺りは暗くなり、そろそろ本格的な帰宅ラッシュ時間になっていた。

「外は暗いから、気を付けて帰りなさいね。」

「はい、色々とご迷惑をおかけしました。……すみません。こんなに遅くなってしまい申し訳ありません。」

先ほどまでの取り乱し様に顔を赤くする長門。羞恥に恥じる顔は、年頃の若い女の子そのもので、微笑ましく思う。

「全然、平気よ。それより、何かあったら直ぐ相談してね。愚痴でも何でも聞くからね。」

人一倍努力してしまうこの艦魂のより処とは言わないが、心の窓口になればと切に思う。姉と慕う存在の気遣いに、心から感謝の意を込めて敬礼し、そのまま部屋を後にした。

既に辺りは暗く、薄暗くなった廊下を歩き、外の出口に向う。角を曲がろうとした先に小さい塊が飛び出してきた。

「ながとさん。」

その塊は、先ほど会った、同族の大和であった。顔の泣き跡は綺麗に拭われ、落ち着いた様子だ。

むしろ、拒絶された長門のほうが、どう出てくるか内心、敏感になっていた。

「大和、どうした。森下さんは。」

内心の動揺を押し隠し、できるだけ穏やかに尋ねる。

「もりしたしやんは、おしごとあるから、おしごとのおへやにかえるって。」

ぼくはばいばいしたの。じぶんでかえるからだいじょうぶだよって、いったの。」

一緒に付き添っている森下の手から脱出して、ここに居たのだろう。宇垣の部屋から、外の出口に出る場合は、この角を曲がらなければいけない。そこまで推測して、この幼児は待っていた。

ただ、宇垣と長門の話がどれくらい長引くかは、計算外であったが。

「あのね、ぼく、ながとさんにいわなきやいけないことがあるの。」

幼児のたどたどしい発音が言葉を繋ぎます。

「あのね、ながとさん。ただいまかえりました。」

ぼく、うみから、みんなのもとにかえってきたよ。ながとさんとまえにしたやくそくまもったよ。」

それは、昔々にした約束。戦艦としれ教えた最後の授業に言った言葉。

「私たち艦魂は、最後は海に沈むだろう。だが、それは『身体』だけだ。魂は沈まない。魂はきつと戻ってくる。

艦の兄弟妹達も皆戻ってきて、いつか再会できるだろう。大和、お前もいつかは、海に沈むかもしれないが、絶対に帰ってこいよ。みんな待っているからな。」

その後、長門も大和も先の大戦で別々の海に沈んだが、大和は、教えを忠実に守り再び出会えた。約束を守ったのだった。長門の教えを受け、立派にその任務を果たした。

（私のした事は、間違ってたな。）

その事をこの小さい艦魂から実感させられる。

こそばゆい気持ち湧き、無性に嬉しくない。長門は、微笑みながら、膝を折り、大和の頭を撫でる。

「ああ、約束を守ったな。お帰きなさい。大和。」

教え子に逆に師が教えられるような気持ちで、長門は自分の在り方が確信できた。

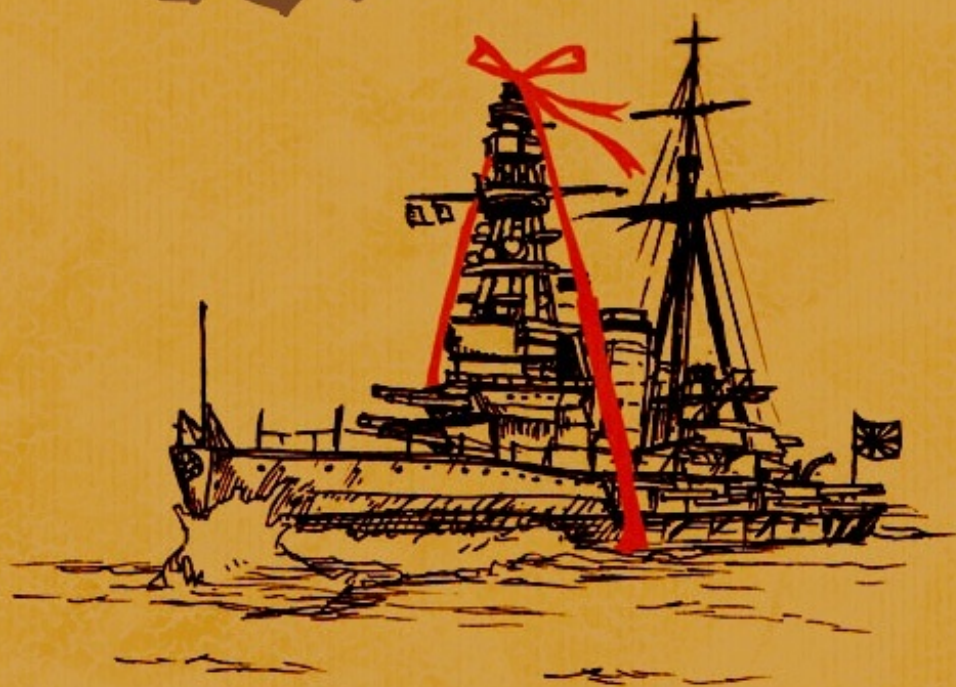
長門は頭を撫でられ、にこにこ笑っている小さい大和を抱きしめる。

もう外は夕闇で暗く、ネオンが灯り始めていたが、その淡い光の中、艦魂達の再会を照らし出したのであった。

戦艦長門アインソロジー

平成二十五年 度

赤道祭



海の底なんて、無かった。

ひたり、ひたり、と冷たい海水が壊れた甲板に滴り落ちる。それが自然現象であるとはいえ、今この状況においてはちようど人間が冷や汗をかくのに似ていると思った。どうして。到底理解できない事態が起こっていた。認識の範囲を超えている。遂に私は狂ってしまったのではないだろうか。そうは思えど、私は私である以上この感覚を信じる他にない。しかし、一体誰が信じてくれようか。

海の底に沈んだと思ったら、突然虚空に放り出されたなどと。

現在、天上から海面に向かって落下中だなどと。

「——きゃあああああああ！」

それまで一度も上げたことがなかった悲鳴。その直後、艦底が着水するのを感じた。

入道雲すら浮かぶ呑気な晴天を背景に起こり立った巨大な波。ほんの僅か遅れて、質量に比例した凄まじい轟音が響き渡った。



麻刈透

戦争と共に彼女ら、軍艦の時代は終わった。かつて隆盛を誇った大艦巨砲主義の産物も、兵どもが夢の跡——「彼ら」が新たに作り上げようとする「平和の国」には最早必要とされなかったのだ。終戦まで沈まずに残った仲間達は皆次々と解体され、再び物言わぬ真鉄まがねに還っていった。

『例えこの身が無くなるうとも、フネでなくなっても、復興の資材として生き続けることができるならばそれは本望だ』

艦艇同士でのみ通じる「通信」。勇名を馳せた老戦艦は最期にそう言い残してその生涯を終えた。遠く離れた地から彼女はその「声」を聴いた。

私が人間であったならば、きっとこんな時には泣いてみせたのだろう。

彼女は思った。「泣く」ということの定義は、涙を流すということ。よって、いくら人の真似事をして艦体を海水で濡らそうと泣いたことにはならないのだ。せめて「泣き声」を、それだけでも真似してみようと「声」を上げて、フネは言葉を音として発する機能を持たないので人間の定義する所では「鳴き声」にすらならないのが関の山なのである。

意思を持たぬ鋼鉄への還元。自分の最期もまた、そうであると彼女は思っていた。ただでさえ戦艦が用済みとなった上、損傷の激しいこのからだではもう、フネとしては使えない。資材か、スクラップか。いずれにせよ、「戦艦長門」としての存在とこの意識は無い。帰す。フネである彼女が意思を持っていることを知る者はこの世界で僅か一握り。さらには、いつ撃沈されて途切れるか分からないような意識である。鋼の装甲の中に宿るのは、そんな儂い魂。

しかし、彼女の予想は外れることとなる。与えられたのは、「標的艦」としての最期。彼女は悟った。「彼ら」が自分を「処刑」するつもりであることを。「国の誉れ」であり戦力の象徴である自分を始末すること、それが「平和の国」を作ることの必要条件だと「彼ら」は認識したらしい。

そういうことか。

その思惑を悟ってもなお、長門は不思議なほどに冷静であった。「彼ら」には「彼ら」の信念がある。彼女は全てを受け入れた。フネとは常にヒトによって行使されるものである。運命。定め。そんな言葉が思い浮かんで泡沫のように消えていった。そうして彼女は高い鼻の人間達を乗せて、最早航海すらままならないからだで海を渡った。終わりを迎えるために。

そして、あの夜。

沈む。そう認識して、からだの力を抜いた。ゆっくりと黒い海に浸されていく。抗うことなくその過程を受け入れた。この意識もやがて揺らめいて、海底へと消えていくのだ。徐々に傾斜していくからだ。転覆することを悟った。それでもなお、沈下に身を任せ。船体が大きく傾いた。

その時、最期を待つ心に響いたのは一つの無邪気な声。

『私達のいのちって、フネの幸せって、一体なんなんだろうね』

月明かりすら届かない、夜の冷たい海の中。呼び掛ける者などない。それは、彼女の記憶が呼び出した幻聴。

「ごめんなさい。 答え、今でもはっきり分かりません……」

優しい声で彼女は言った。思い浮かべたのは、唯一無二の存在だったその声の主の在りし日の姿。

『いつか、一緒に探せるといいのにな』

その時は、平和な海をふたりで旅をしよう。そんな憧憬を語ってくれた。夢の浮橋。戦艦としてはあまりに優しすぎる子だった。

長門は過ぎた過去を懐かしんだ。そして――。

半分、ふたふたと眠っていたようになっていたことに気付いて長門ははっとした。思い描いたのは回想か、それとも夢か？ 隅から隅までを一生懸命思い出す。間違いない。いつもと同じ、実体験と寸分変わらぬ内容。今日もまた、彼女は夢の中で回想をしていた。

潮風がそよぐ。今日も今日とて穏やかな海原の上。投錨し忘れたままうたた寝をしていたため、先程とは多少違う場所にいるのだろう。しかし、この海へ辿り着いてからというもの、辺りを見渡せどひたすら青空と紺碧色の海が広がるのみ。何も変わりはない。何も変わりはなかった。

「いたたたた……」

自身では視認することのできない傷が痛む。夢にこそ出てこなかったものの、虚空に放り出されてそのまま海に投げ出されたことで軽く骨を痛めたらしい。しばらく経った今でもまだ疼く。皆さんがよく言っていた「腰が痛い」とはこのような感覚だったのだろうか。なるほどこれはなかなかつらい。長門はふむふむと納得した。

この謎の海洋に放り出されてから一体どのくらいの時間が経過したのだろうか。自らに取り付けられている時計は壊れてしまっただけで成さないため、それを知る術はない。昇った太陽はやがて沈み、月や星がまたたくことから昼夜という概念はこの海洋にもあるようだが、その周期は沈む前の世界と比べて大分ゆるやかであるように感じる。

そんな異次元の中で、長門はある程度身の回りのことを分かり始めていた。まず、自分のこと。彼女を含めた全ての艦艇は、竣工して引き渡された時からの制御権を海軍に明け渡され、自分自身で意図して動くということは制限されていた。しかし、除籍されることで海軍との間で結ばれていた契約が消滅したらしく、長門は自身のからだを自由に操れるようになっていた。それを知った時、長門は我を忘れてこの海洋を渡り回った。心は素直に「楽しい」と感じた。生まれて初めて経験する、思うままに泳ぐということ。自由。それが、このからだが自分のものであることを認識させてくれた。

しかし、それとともに新たに生まれた感覚に「痛み」があった。彼女はそれまで、フネは元から痛覚を有さないものだと思っていたが、これもまた海軍との契約によって感じなかっただけのようであった。着水の衝撃で受けた初めての痛み当初は戸惑い怖れたが、今はそれすらもからだの所有を証明してくれているようで悪い気はしなかった。

さらに、度重なる爆撃と実験により破壊され尽くしたその艦体は錆び付くどころかむしろ、時を経るごとに元の姿へと「治癒」していく。塞がりつつある各部の破損を日々眺めるのを彼女は楽しみとしている。

「……すごい。もうすっかり改装したての時と一緒にだ」

この海洋の水のおかげだろうか。それとも、潮風？ 身に一体何が起こっているかは相も変わらず全く理解できなかったが、超弩級戦艦である自分が宙を舞ったのだ。もう何が起こっても受け入れられる気がした。美味しい油が飲めないのは少し寂しかったが、不思議なことに海水を取り込んで彼女は泳ぎ続けることができた。

きっと私は生き物になってしまったのだ。いつしか長門はそう思った。「沈んだ」時に何かが起こり、からだの構造が書き換えられてしまったのか。はたまたこの異次元の海がそうさせているのか。しかし、いくら想像を巡らせどやはり全く持って何も分からない。解明する手段も見当たらず、長門は考えるのをやめた。

空の青色。海の青色。その狭間を延々と航行し続ける。きつといつかは違う景色が見えてくるだろうと信じてゆっくり進む。時には自分の最高速度を試してみたくなくなって、全速力で泳ぐ。公試で出した結果にはずっと納得できずにいたのだ。それが公式のデータとして後世に残ることとなってしまったというから長門は少しだけ悔しい思いをしていた。自分はずっと早く泳げるはず。そう思うのは買いかぶりだろうか。そんなことを思いながら彼女が限界への挑戦を試みる度に穏やかな水面には轟々と荒波が立つ。そうして気が済むまで航行し、疲れを感じたらアンカーを下ろしてスクリーンを休ませる。そのような、これ以上ないほどに穏やかな毎日。

その眠りでは久しぶりに、回想ではない夢を見た。

一面の闇。その海の中で「声」を聞いた。誰かが、フネがこちらに呼び掛けていた。聞き覚えのある響きだった。それは忘れもしない、姉妹艦の「声」。

「声」は訴えた。さみしい、さみしい。ただひたすらにその四文字を発信し続けていた。

陸奥、陸奥。

荒涼とした風が吹き荒れる暗闇の中で、懸命にその名を呼んだ。月の光すらない。何も見えない。それでも、無我夢中で泳いだ。感覚を信じる。これが私の夢なのは分かっているんだ。ならば、想像すれば私の思い通りになるはずだ。これは現実ではない。願いはきつと叶う。さみしがっている妹の元へ辿り着ける。嵐の中。狂ったかのようにその名を叫び続けた。自分自身が怒涛と化したかのような勢いで、波を切り裂いて進んだ。

そして、想像は叶えられた。一瞬のうちの画面の転換。目の前に現れたのは、月明りに照らされた鐵くろがねの城。自分と全く同じ姿をしたフネ。

陸奥。

確かめるようにその名を呼んで、長門は安堵した。やっと逢えた。これでもう、寂しい思いをさせずに済む。もう大丈夫、ここにいるよ。そう言おうとした。その時。

「違う」

鋭い言葉が鋼鉄の艦体を貫いた。

「寂しいのは、陸奥じゃない」

その言葉にはっとした利那、月は光を増した。浮かび上がる、目の前のフネのシルエット。顕わになったのは破壊された艦橋。煙突とマストを失った、寂れたフネ。それは、陸奥ではなかった。

さみしい、さみしいと苦しんでいたのは――。

叫び出したい衝動に駆られて目が覚めた。覚醒するや否や真つ先に自分のからだの隅々を確認した。軽い錯乱状態。

よかった。今ここにいる自分に損傷はない。この世界の水が、風が癒してくれたから。今日もまた、泳ぐことができる。そう、からだは大丈夫。

しかし、彼女は気付いてしまった。それまで意識していなかった自身の孤独に。寂しさに。無限に広がるような大海原に、たった一人ぼっちであることに。

思えばいつも、誰かがそばにいてくれた。ヒトであろうと、フネであろうと、私は一人じゃなかった。今、心に巡るのは、懐かしい人々の影。

「――『帰ろう』」

ふと、かつて自分にその命が委ねられていた大きな存在の言葉が突いて出た。偉大な方であった。特別な情もあった。しかし、とうの昔に喪った人である。過ぎ去りし人である。振り返るな、自分に強く命じた。思い出すな。思い出してしまったら何か壊れてしまう。忘れた方がいい。忘れるべきなのだ。

あの、強く優しい微笑みを。

ぼたり。

甲板に落ちる水滴。艦橋から滴ったものだった。空はからりと晴れ渡っていて船体は乾き切っていた。それでも、艦橋からは止めどなく水が流れ出した。零れ落ちる数多の雫。それは甲板を隈なく濡らし、あつという間に溢れた。これは何だろう。そんなことを考える余裕もなく、長門はただひたすらに雫を落とし続けた。もしも甲板に船員がいたとしたら、スコールだと慌てふためいたことであろう。日が落ち、夜の闇に包まれてもなお、それは止むことがなかった。疲れ切つてそれが枯れそうになったらまたぐいぐいと新たに水を取り入れた。からだがもういらなと言つても、飲み続けた。水がこのからだを治してくれたというのなら、この心もどうにかしてほしいと思つた。忘れるという機能を持たない、重大な欠陥を持つたこの心を。

そうして、一体どれほどの時間が経ったであろうか。長門は航することもせず、錨を下そうともせず、波に身を任せていた。ただ、ぼんやりと夜の海面に浮かんでいた。

『帰ろう』

あの声がいづまでもこだましていた。思い浮かべれば、あの人の笑顔。純白の軍服に身を包んだ小さな体が、こちらに向かつて手を差し伸べている。叶うならばそうしたかった。もう一度、あの海へ帰りたい。自らを愛してくれる故郷の人々のために生きたい。もう一度、艦隊の仲間達と話がしたい。あの人を乗せて万里の波濤を渡っていきたい。貴方に、逢いたい。

しかし、そのような追想もこの海には届かない。「戦艦長門」は沈没した。帰る場所はないのだ。なら、どうする。

ばかり。艦橋からの最後の一滴が甲板を鳴らした。——答えは明白であった。

夜が明けるのを待って、昇りゆく朝日を拝んだ。願うは、航海の安全。こんなにも穏やかな海では願うまでもないと思いつつ祈った。祈っておいて損はない。迷いはなかった。あの「洪水」が洗い流してくれたのだろうか。今の心はまっさらな心。澄み切って、どこまでも行ける気がした。

もう帰れないならば、先に進もう。帰る場所を見つけようではないか。

潮風そよぐ海。日の光を受けて輝くその煙突から吹き出すは真っ白な水蒸気。軍艦旗の旭日が夏の風に翻る。

「——いつかきくと、帰ります」

この海を行こう。船出の時だ。

誉れ高く、フネは笑った。

——ふわあ。

煙突から白い蒸気を吐く。その巨大なフネ——陸奥は素っ頓狂な声を上げた。

「ん……、もう朝？」

日はもう既に高く、ざらざらと海面を照らしていた。眩しい光がその巨艦を包む。それでも起きた心地のしない彼女は、思い切り海の中へ潜った。ざばり。大波が巻き起こる。そんなことはお構いなしで水中に身を潜めていく。それはまるで鯨のよう。やがて、艦橋の頂まで水に浸るやいなや、フネは怒涛の勢いで再び水面へ現れた。浮上。潜水時と似たような音が轟く。飛び散った海水は真昼の日の光を反射してきらきらと輝いた。きれいだな。それをしげしげと見つめながら陸奥は思った。

「……ん？」

その時。その視覚が何かを捉えた。舞い散る水滴の向こう。遙か彼方に視認したのは大きな影。陸地か？ そう思ったのはほんの一瞬。彼女の認識は即座にそれを否定した。それは明らかに移動している。水しぶきを上げて進んでいる。

「……フネ？」

それしかないだろう。認めたと同時に、心が揺れ動くのを感じた。それは遙か彼方で、こちらを横切ろうとしている。彼女はこちらに気付いているだろうか。自分の声は届くだろうか。様々な考えが交差したが、高鳴る胸は彼女を前へと進ませた。かつん。何かがかかるような音。あれっ、と抜けた声を発する。アンカーを上げるのを忘れていた。それでは進めるはずもない。陸奥は自分の間抜けさに苦笑した。

慌てすぎだよ。

それでもはやる気持ちは抑えられない。彼方を航するフネは凄まじく速い。まるで、自分の最大速度に挑んでいるかのようにも見える。しかし、負けてはいられなかった。この世界に沈んできて初めて見つけた自分以外の存在。逃す訳にはいかない。抜錨するのにもどかしい。走った。

待て、待って。

彼方を航行するそのフネに届くように、最大限の大きな「声」を発しながら走った。水の抵抗がじれったい。キャパシティを超えて出す速さが苦しい。海軍との契約をしていた頃、艦隊にいた頃の感覚が今だけ蘇ってほしいとフネは思った。あの頃の自分は疲れを感じなかった。どうか、今だけはそんな昔に戻してくれ。

そして、彼女は見た。

その見覚えのある艦体を。否、見覚えがあるなんてものじゃない。自分と変わらぬ姿をしたフネ。間違いない。そんなフネは世界にただ一隻しかいない。そして、そのフネもまた、彼女の姿を認めるなり動きを止めた。思考も止まっていたかもしれない。邂逅。

夏の日を浴びて輝くその艦橋に記された横文字を陸奥は見た。

『Old Navy Never Die!』

それは、一つの時代を駆け抜けた「国の誉れ」の艦体によく映えていた。とても似合う、そう思った。二隻のフネの煙突からたなびくは真っ白な蒸気。風に乗って流され、この世界の空気に溶けていく。

「おかえり、長門」

フネは微笑んだ。そして、泣いた。

完

あとがき

長門の幸せについて 本気出して考えてみた

関東大震災、2・26事件、ニイタカヤマノボレ……激動の時代、その転換点にはいつも戦艦「長門」の姿があった。

世界最強の7隻「ビッグ7」に列せられ、「長門」陸奥は日本の誇りと国民に愛された「長門」が、70年の時を経てもなお我々を魅了して止まないのは、日本海軍の栄光と没落とを共に体験し、そしてその幕引きをするがごとく、独りピキニの海底に去っていった高潔ともとれる生涯のためであろう。

かの戦争で人々が打ちのめされた時、最後の武士道を見たのは、他ならぬ「長門」であった。



「捕鯨艦ナガト」夕陽に眠る長門
「長門だと思った？残念！扶桑ちゃんでした！」
等色々と思いつきましたが、今回は固定保存して
三ツ星ホテルにしてみました。

雨郎様、素敵な企画をありがとうございました。 五郎

初めまして、たまと言います。
拙作をお読みいただきありがとうございました。
つらつらと小説を書き、初参加で、つくづく書いた作品が
場違いかなあと冷や汗ものです。
今回は、現代版の長門（女性）とによ宇垣さんで、お話を
書きましたが、頑張り屋の長門お姉さんが弟の大和君に教える
お話もいかなあ。妄想中です。
支部で、他の作品（海軍軍人中心）も掲載していますので、
何かの機会にお目に留まった際には、よろしくお願ひします。

H25、7 たま

ご参加
ありがとうございます
ございました

長門アンソロジーおめでとございます！
長門さんを幸せにするという事で図書館へ通いつめました。
改めて長門さんは良いですね。かっこいいです。
金剛型も大和型も良いですが、長門さんへいつの間にか原点回帰しま
す。
「日本人なら長門型だろ」というオリキャラが長門さんをナンパして
だけの話になりました。
「ほら！異類婚って昔からあるし!!!」(by 佐藤)
長門さんに少しでも幸せになってほしくて結果こうなりました。
軌跡は皆さんの想像にお任せしますという終わり方にしました。
皆さんの長門さんに起こった奇跡をご堪能ください。(それってま
るー)
今回は参加させていただきありがとうございました！
また何かありましたらよろしくお願ひします。

平成式五年 七月 墨丸 拜

長門について文章を書くにあたり、久々に本を
資料として読み込みました。既読の本でも資料と
して読むと発見があり、面白いものです。

資料漁りついでに黒歴史発掘してギャー、でし
たが。なにはともあれ、無事(?)にお話が出来
てヨカッタヨカッタ(・w・)

このような貴重な機会を与えてくださった雨
郎氏はじめ皆様に感謝いたします。

北陸の地より 煤渡



小説で参加させて頂きました、麻刈透です。
戦艦長門の「幸せ」を考えてみた際、様々な形が思い浮かんで
迷ったのですが、今回は国の養れの軍艦としてというよりは
一隻のフネとしての彼女を自分なりに描いてみたつもりです。
なかなか難産でしたが、卓上に佇む長門(1/1100)を眺めては
幸せをもらい、瞬間的に超回復したりしました。無事完成した
のは彼女のおかげだったり。長門かわいいよ長門。
最後になりますが、このような素晴らしい企画に参加させて頂き
ありがとうございました！

麻刈透

あいさつ

戦艦長門、凜として美しいこの戦艦に恋し、

気が付けばアンソロジーを企画していました。

「戦艦長門の幸せ」をテーマに集まった六名の作品、

お楽しみいただけると思います。

短い制作期間にもかかわらず、素敵なお作品を執筆してくださった皆様、

アンソロジー企画をご支援くださった皆様、この本を手にとってくださいました皆様、

ご協力いただいたたくさんの方々、深く御礼申し上げます。

長門だけに、長々と書く……のも何なので、短いながらこの辺で。

また来年度の赤道祭でお会い出来たらと思います。

平成二十五年 七月 アモ アマヲ



海の底で眠る艦を想いて

六名、ここに戦艦長門アンソロジーを執筆す。